

## 学芸員の研究

神奈川県立近代美術館 山梨 俊夫

### 美術館での仕事と「研究」の関係

美術館の仕事性格付けるもの = 現場

大量の作品と向き合う。作家と付き合う。教育活動で生身の人と触れ合う。

市場を含めた美術界と関わる。

### 「研究」成果の表われの違い

大学、ないし学問 = 「美術史」という日本近代化過程で生まれた概念の範囲。

学界内での読者の想定。

学問体系への寄与。

美術館 = 現代との直接的関わり。体験的（作品と、作家と）

広い範囲の読者（例：図録を買う人）

現場への還元。（展覧会の実現など、文章執筆に限らない）

### 「美術史学」、「美術史研究」といった概念の変更の必要性

美術館の現場だけでなく、急速な時代転換に応じて、学問側が、近代現代を積極的に柔軟に取り入れる必要がある。

失礼ながら、旧態依然の学問領域、歴史カテゴリーに止まっている印象を受ける。

最新の学問成果を反映しても、それが開かれた場に出てこない。

### 神奈川県立近代美術館の場合

過去 = 積極的に美術館外の場で文章を書く。

画集、全集、雑誌、新聞など。ジャーナリズムとの結びつき。

現在 = 展覧会図録、紀要の類など、美術館自身の刊行物が中心。若干の新聞記事、雑誌。

一貫しているのは、個人的な著作の刊行の奨励。

### 学芸員は苦しいか？

忙しいのはあたりまえ。時間は見出せる。

日常活動で培われる研究の基礎体力（作品、時代に触れる機会、それを通じた時代認識）

展覧会活動や教育活動によって開かれる問題意識と研究テーマ。

学芸員の仕事（研究）を広く認知させる。

学芸員の養成現場である大学がまず初めに「美術研究」「美術史研究」の考え方を变える。